重修真書太閤記 八編 三

和書門 類
一六二二一 號
二〇〇 函
七 架
二一〇 冊

内閣文庫
和 類
一六二二一 號
一一〇 冊
一七一 函
一一 架

内閣文庫
番號 和 16221
冊數 110（73）
函號 171 39

軍記 九ノ三

国立公文書館
National Archives of Japan

重修眞書太閤記八編巻之七

諸將清洲の城に會合の事
并 柴田佐久間内談の事

尾張國春日井郡清洲城ハ北畠中將信雄卿の居城なり然るに信長公西國進發の間東國の押えとして在城せられけるが天正十年六月二日明智光秀逆心し二条本能寺の御旅館へ押寄責奉りしかバ右大臣家御生害あらせられし由四日の早天に聞えしかども家老の面々打寄評定しけるがそれほどの事定めて明智一人の胸間より出しにはあるべからず定めて一味同心のかれ

日本政府圖書
書籍館
淺草文庫
町田久成獻納之章

多かるべしうかつに出陣其詮あるまじと長詮議に六七日を過しける内に安土へも明智が軍勢馳向ひ攻しかども御臺所をはじめ幼稚の君達いづれも日野の蒲生右兵衛大夫が許に忍ばせ給ひしかバ取々に沙汰したりけれバ爰へも必定寄來るべし然バ何として防ぐべきやと心々に其用意をぞなしたりける

流布本に前田徳善院法印三法師君を供奉して清洲へ落來りし處へ安土より蒲生右兵衛大夫中將殿の北の御方をはじめ幼稚の方々を御供し奉りし由を記せりといへども誤なり三法師君も日野へ御入ありしを明證あり御臺所ならびに中將どのゝ北の御方ら蒲生が元より預ケ奉りし所也

兎角するほどに都にて光秀將軍に任じたりなど明智を引ものも多かりしかバ是を誅罰せんと又容易からじと評定に徒日を費しゝかバ羽柴筑前守西國より馳登り山崎に於て一戦し終に明智を打滅しける由も聞えしかバさなきだに羽柴筑前守西國を切平げ其威勢諸人におそくれしに今又明智を誅して亡君の仇を復しける大功なり信雄君手を虚しく上洛あらんを頗る面目なきに似たり然のみならず神戸三七殿ハ筑前守と共に山崎へ出張ありしと云說もありかた〴〵以て上京容易になりがたしと思はれける處へ柴田修理進勝

家江州簗箇瀬より清洲へ參向ありて申けるハ二日此大變ハ今更申上る詞なし君の御性質剛勇にましませし人を人とも思召されねバ白龍の魚服豫且の網にかゝらせ給へり勝家如きも北國に下向仕て十日路を隔て候へバ急々に上洛仕りがたし其上に上杉また累代武功の家にして龍虎の如き侍多く候へバ引取をなす甚だ難義なく徒に日數を過し候うち彼猿面めに大功を立られ候事殘念とや申さん腸を千斷仕り候君にも當城にましませば京都まで僅に三十七里大河を二ツへだてゝハ候へども路次平かにして馬強くバ只一日に馳上りぬべし安土へも廿餘里に

候ものをむざ〳〵と明智めに取れ候事御手ぬかりと申上べく候猿面めが定めて京都に罷在て万事を支配仕るべくその上に安土坂本まで彼奴めに切靜めさせ候ひしをおもへバ口おしく候せめて坂本なりとも御手に取候ハゞ安土を御本城に候へバ必定御旗をさしむけられ候半を專一の處に候ひしものを其まゝにたゝし給ひしを餘所のおもなく迄如何に候然ハ日野へ御參候て若君御臺所なんどの御守護にくもせらるゝの御事におはしまし候ひしものを今日迄無沙汰に過させ給ひしを誰か耳にも善とハ聞まじく候斷てハ猿面がさぞかし人もなげに擧動申べきを默々と見居候べき

併道理の外に勝べき筋なく候但今ハ故殿の御仇を打
果し候へバ御遺跡の評定こそ尤大切に候なれ然るを
今日まで筑前より此方へ何とも申入ざりしを頗る越度
たるべく存候因て御遺跡の評定の為と仰られ候て諸
将をめさるべく候左候て筑前も必定参向仕るべく候
其節の次第によりて筑前に喧嘩しかけ是を殺し可申
と申ければ信雄を始何も此義尤しかるべしとて諸将
を清洲へ呼集めらる其人々には羽柴筑前守池田勝入
齋丹羽五郎左衛門尉蜂屋出羽守高山右近大夫筒井順
慶中川瀬兵衛佐久間玄蕃前田又左衛門佐々内藏助森
勝藏毛利河内守以下一人も残らず参會あり勝家めさ

れらく佐久間玄蕃を招きて申けるハ筑前が今度の忠
切莫大なるをハ誰にても傾け申べき理なられバ此よ
りして筑前が威勢を以て我等をもさぞかし陥め候は
んずらん然を彼是おもそろく彼を妬むと人ハいはん
只今秀吉と勝家との争ひに及ばん時其方飛かゝりて
く筑前を拉殺し申べきなんなりといへバ元より短氣
の玄蕃也一議にも及ばず承知し心にこめて其坐に臨
むさて評定の坐上なる柴田修理進勝家故殿の妹の夫
といひ當家の老臣也涙ながらに發言しける様故殿の
御事ハ面々此心中我等と同じまなるべし是をとくりか
へしても詮なし御遺跡の御事ハ如何に思ひたまふにや

是こそ各々の異見を承るべく候へ腹蔵なく申出られよとありしかども何も口を箝んで詞なし良ありて筑前守申けるハ柴田殿の仰にハ何にも故殿の御事ハ申べき詞もなし御遺跡の御事ハ既に正嫡正統のましますものを今改めて御評定との義不審に候と申されバ勝家膝立なをし申しハ筑前守正嫡正統のおはしますとハ何をさして申されしぞ三七殿御邊とこそ山崎へ御出馬ありしを以ていはるゝにや修理進ハ心得ず候と怒り聲にて申ければ筑前守少し静めて申様柴田殿の仰にて腹蔵なく申せとありしにより秀吉が腹にありし處を申せしにて候三七殿ハ某と共に御出馬ありて御合戦も遊されしハ三七殿を主君と仰ぎ奉るべく候何とて今日御評定の御坐へ出仕有べき由とや誠に道理なれど柴田も返す詞なく然バ正嫡正統と筑前守のいはるゝは誰殿にてましますぞやと申により秀吉然らば故殿の御嫡子ハ中将殿にてましまし中将殿の御嫡子ハ三法師君にておはしませば是こそ正嫡正統と申べけれ但此外に故殿の御跡式に立たまふべき御方やおはしますと存して今日此御坐席へ参上仕りあれと申其時勝家申けるは何さま三法師君御正嫡御正統たることは誰にても別意なく候へども御幼稚におはしませば西に毛利大友嶋津など東に北条上杉伊達いづれも弓矢巧者

にはものを征伐あらせられ故殿の御志を継せたまはん
を難くやはせん付て三法師君御生長まで北畠殿三七
殿を御後見となしさ可ならんと存ずるハ如何はせん申と
申されバ秀吉袖かき合せ珍敷御評定かな北畠殿ハ故
中将殿御同腹の弟君にましませども伊勢國司の御養
子にならせたまへバ北畠殿の侍中ハいまだ清洲に伺
候してはおりず神戸殿ハ御別腹にましませバ上是も伊勢
の神戸氏御遺跡には左はへは此両殿ともに三法師君の
正しき叔父君にはましますれその御家臣らハ北畠
神戸の家の子譜代にはまして諸侍中の寄合に當家譜
代重恩の方々と他家の人々と會合してて心中を盡し

がたくはなんぞ左様の處より異論起りてはなど自然
と家中二川に立ち可申幼君補佐の御政事と思え
ますぞは抑柴田殿ハ御年臈と申累代の御家老と申御幼
君御生長まで御補佐あらせられはせん誰かハ御下
知を背き申べき三法師君御幼稚とハ申せどもむかし三
歳にならせたまふ八幡大菩薩ハ胎内におはしましてさへ
武内大臣ハ補佐しまゐらせ三韓迄も退治ありしと承る
る柴田殿武内となられたまはゞ嶋津なりとも北条にも
もん誰かハ従ひ申さゞるべき此所を定りたる所を彼是
と御評定はそのいがなしさよ若又柴田殿の御補佐か
たく候はゞはちに秀吉只一手にて打砕き可申に

てんと申けれバ勝家も黙然として言いさで佐久間も取付べきすきもなかれバ勝家が顔をまもり筑前守を見かへり腕をさすりておたりけり是ハ筑前守山崎の功より定めて三法師君の御後見して諸将を進退せんと云べかれバそれより事を起して喧嘩を仕出しその上にて玄蕃に事をなさせんと計ありしをのすべて徒事となりしかバ二人とも内心に末始終いかゞあらんと思へども秀吉の詞正しく理あることもすこしもなきさる故に勝家も詞を出さゞりし也佐久間玄蕃筑前守に向ひ筑前守殿のいはるゝ處理至極なれ然しながら北畠殿神戸殿とても三法師君の叔父君に在をバいづれとても

両御所をもつて御後見に立られんを順道かと覚候叔父にてハ勝家近年老衰にして及び候へバ御後見の事如何なるべきかと存候両御所に筑前守殿御さし添候て天下の大小事御取計ひ尤然るべく候と申ければ筑前守いはくよ佐久間どのの左様に仰られし柴田殿御年高しと申せども御壮健にて勿々御老衰と申べからず只筑前事ハ御存の通り柴田殿の御影をもつて御家臣の列に加わり候りしなり何とて柴田殿をさし置左様なる出やうさや只故殿の御時の如く西國の御先手仕るべきおそい候と申されバ玄蕃も案に相違しさすがに横紙も破りかね手を拱きて居たりけり

流布本に柴田佐久間の問答ありて鄙俚にして事
實相違を依て別本に因て改刪す

秀吉理を述て諸將を服せしむる事
并勝家長濱所望の事

柴田修理進勝家胸中の計略すべて相違せしにより何
といふ事も俄の事にして然るべき策もなければ筑前
守に向ひいはれけるは筑前守御身も某も甲冑ハ脱間もなく
股ハ馬上にありこえし雨露霜雪に身を勞らしけるを
言までもなく故殿の御事ありしより不思議にかく一
席に集りしを不幸の幸とやいふべしかくの如き再會期し
がたしいざや一獻酌べしといふにより勝家と筑前守

は亭主の坐に居り諸將を客にしてそれ〴〵に銚子土器
引をなりしかば勝家まづ大土器を取亭主の役に御試
いたすべしといひければなにくと受てぐつと乾しかば
筑前守これを肴にといひさま蝦魚の殻焼を出しける
を勝家取よりはやく只一口に七つ八つばかり喰盡しま
た大土器を幾度となく傾けそのうち其坐に倒ふし
大鼾かきて臥たりしは傍若無人といひつべし是ハ筑前
守に腹立せんとの趣向なり然れども筑前守これをば
見ぬふりにて諸大將と打とけ物語りし更に余念なけ
ればありけるに修理進ふと眼をさまし筑前御
邊ハ都に久しく住なればすべて華奢風流に見えて禮

儀あり我等ハ田舎武士その上近年北國に住て鹿猿に
のミなれ近付たまふものゆゑ殺風景にしてさぞかしお
かしくおもひ玉ふべし然ども御邊と我等とハ舊き好
をいへバ馬下なりし藤吉とよびしものゝ國を切開
き人數をもち城をも多くもちて大名といはれ我等と
同じ莚に膝をくミ一ツ銚子の酒のミて打解かたる今
日のたのしさなれど不思議の因縁ならずやその上御
邊の勸めによりて勝家天下の御後見となれバ越前北庄
より近江の安土へ程遠し御邊の長濱を某に給はへ御
邊ハ明智が闕國のうちいづれなりとも心に任せ玉へと
いひけれバ筑前守尤の御所望なり神速に避渡し申べ

しと答へしかバ修理進大に喜び神速に得心ありて長
濱を御渡しあるべき由厚かじけなく候然ば近日の
うち佐久間玄蕃を受取に遣すべしと申けるにより
筑前守いや佐久間殿にハ御渡し申まじといふ佐久間
大に怒り何故にこの玄蕃に渡したまはぬぞ其旨趣を詳
に説たまへその渡したまはぬと云譯なくバ其坐を起せじ
と刀の柄に手を掛て立向へバ一坐の面々すはや事の
出來なんと手に汗を握りて見居たりけるに筑前守
いと長閑におし静め玄蕃殿左様にせきたまふなよ長濱ハ
江州平均の功を御賞美ありて賜はりし處なり秀吉が
身に取て最大切の城地なれども三法師君御後見たる

柴田殿の御所望なれバ故殿へ直に御返し申上ば心得にくく速に避まゐらし奉る處なり然るに御身をもつて御渡し申はてハ聊以て心に安からぬ處のはなり其故いかにと申に御身ハ柴田殿の妹御の子なれども柴田どの乃御子に伊賀守殿のおはしますを閣てハいかゞ但甥ハ子にまさる理のはにやいうにといへれど玄蕃も辭なく牙をかくし拳を握く扣へさて勝家ご意を聞て筑前守の心入厚きを今に始ず喜び入てハ何さま勝家が子のはときしなき甥の玄蕃に請取せんと申つるハ勝家が誤りてはいふまでも伊賀守を以て請取べくはとて殊に心地よげに見えしかど玄蕃も理に折其まゝに坐

席をたつ勝家長濱を望まれしをハ定めて筑前守これを否むべしいなまバそれより事を引出してと策ありしに凡人ならぬ秀吉なれバ勝家の胸中を早く悟り心よく是を受引かつ長濱受取まゐらしのちに付て勝家勝豊盛政三人の間に不快を起させし深慮を誰も知ざりしに後に筑前守語られたるハ勝豊といふも實ハ勝家の子にあらず家老の今井治兵衛といふものゝ子なりそれを勝家養子となし伊賀守とハ名乘せし也盛政ハ實に妹の子なれバ結句養子の勝豊より親しくなしけるを知つれバ盛政して請取んといひけるを拒みし也さありとて養子と甥とハその親しさ各別のものなりといひ

されバ勝家も争ひかねて勝豊してとる云し也されど
もとづと勝豊の心よ養父の盛政しそといひつるをも
恨ミさせ盛政よハまた勝豊なくばとおもはせ互よ一箇
の恨悶をかもさせし謀なりこれより勝豊養父をうらミ
かつハ筑前をたのもしきものと思ひ養父を疎ミ某を頼
ミけるによりて終よ父子の間よ隙を生させし也又盛政も
勝豊を失ひなバ柴田が家ハ我ものとなりぬ様よおもひつ
しを只この一席の問答にてしれりとなん戦國の間の人心
さても知得がたきをさとりし勝家ハ筑前守を打殺さんと
せし謀ハ成ざりしかバなかなかに長濱を取得し
を歓喜びあそびて土器とりて筑前守にさして筑前守下

戸なりとて強くいなミけるを盛政すゝみ出天下の御後見
たる勝家が土器いなミ給ふ様やあるべく筑前守この坐上の
上首なり上首より左様の例を出されんを近頃その意を
得ずと申けれバ筑前守これハ誤仕り何さま御後見より
賜はる土器なり更よいなミ申まじと云よりも早く大土器
を引受只一息よのミほして勝家よ返さんとなしけるを
勝家聲かけ見事にのミたるものかな三盃のミ給ひてその
のち賜はりなんと申されしかバ筑前守然らバ何ぞ御肴
をといふ其時勝家もとミより肴といふハ何よけんあらそ
ひて丹波の國ハ當時闕國長濱のかはりにまゐらすべきさ
んそれにても不足よおもふなれバ勝家が首なりとも手足に

てる御望にまかせくれさきみかさんといひし時ては辱なし
その御肴のひきんにかふといひさる三盃めのゝ見事にのミ
引して勝家にさし勝家も筑前守ハ下戸なりとおもひしが
かゝ無理に強しまふ丹波國をもゆるさしあるか上に首を
も手足をもとひつるてもの悔しさよと心の中にはお
もへども早いひ出しをれまで後悔すれども甲斐ぞなき
き筑前守まてるは上戸なりけるを常に偽て下戸なりと
いひしことを眞實と思ひし柴田が計畧をすべてこゝなき畫
餅となりける口おしさ佐久間と共に只二人かへり合て
いかにぞもと心を苦しめけるとかや

重修眞書太閤記八編巻之七 終

重修眞書太閤記八編巻之八

瀧川左近將監柴田修理進相談の事
并秀吉勝家の腰をとめむ事

瀧川左近將監ハ三國峠おゐて上杉の為に敗軍し厩橋へ
引返さば上方にゐて右大臣殿御生害ありし由の飛札到
來しける處に鉢形の北条安房守氏邦出張しすでに神
流川を越て近々と寄來る由注進ありけれハ左近も
後ハ見すくあらばさりとて人心をおそるべく以て動揺し
て十分の合戦もなるまじ然ば北条をたばかりて中をし
やすと碓氷峠を越さんとおもひ付まづ北条が方へ使

者を立し主にて候右大臣信長公去二日に逆臣明智光秀が為に生害なり我等も上州を捨て上洛仕り弔合戦を心掛候よりて厩橋の城を御渡し可申也但某と是非御一戦との事に候なバ力なく候へ共神流川を打渡し鉢形迄も罷向ふべく候といひおこしかバ安房守聞て偖ハ此頃の風聞實なりけり然し瀧川厩橋を捨て上洛し主の弔合戦せんといふを遮り止ん理なし此方よりも使者を差向返答なすべしとて瀧川が使を返し安房守の別の使をもつて右大臣殿御事有ける由御心中察し入候付て逆臣誅伐のため御上洛のよし是又道理至極に候左候らバ首尾よく明智を御討候て重ねて御下向の時に弓箭の運をバためしゆくべく候御心靜に御旅行候へ碓氷峠までハ安房守が人數を少々めしつれまゐらせ候へとし左もなくバ手指めの有まじく候とて足輕五十人に鐵炮もたせ瀧川が先に立て路を案内しければ安中松枝の者どもハ式代してぞ通しける抑織田家の大将三人のうち西國に向ひし筑前守ハ毛利を拉ぎて上洛し瀧川ハ敵を欺き敵に路次を案内させて上りつるを似たれども居城を捨しハ云甲斐なし柴田ハ敵に囓止られ難義の軍して上りつるを能々おもひ合されれバその優劣も自然とわかれつべし一益清洲へ參着しければ勝家大に悦び耳に就ていひけるハ京都の大變

こゝと其まゝ馳上り明智を伐んと存じつれども某ハ上杉勢に跡を慕れ難義の軍に數日を費しけるうち筑前守手早く切上り只一日のうちに明智を責崩し剰坂本までも切取て光秀を日岡礫おこし右大臣殿の御内葬を執行しその上禁裏に暱近し京都の大小事一人して取賄ひゆかり畿内の武士ハ筒井蒲生山岡池田高山中川をはじめ皆其旗下に從ひ其上に毛利三家と親しを結び播州備前美作までも彼が領する處なれバ自然と威權おこなひがたく如何おゝして筑前守を亡さしゆゑたゞ織田家の御為しかるべからバこれを除く謀こともけれバ一益や樣いろあるも我等故殿の御恩なよ

て關東管領とまでなりゆひしかバ一刻も早く馳上り明智を討んと存ぜしに遠路とや途中の一揆は支えらへれ漸昨日今日爰まで上り着ゆて承りゆへバ彼猿めが大功嫉しとも惡しとも云べき樣なし柴田殿なも上杉の為に追迫され給ひしにより山崎合戰にも後れたまひつれバ同じく猿をバ一益と同じ樣に思まさんさう迚今猿と中違ひしたまで誰々も猿を妬こその同士軍長けなしとや批判されそれのみならず猿に一味のもの絶も多く猿が眷屬も定めて三万三千餘ありもゆくし然らバ是と弓箭を取んとさへ却て自滅を求る基なるべし唯緩々と思惟ありて猿が過を見出し是を鳴して一味を

結び然して後に事を決し申べしまづそれ迄ハ和儀を厚くせんを第一の計策に候と申ければ勝家大に悦び瀧川柴田両人亭主となりて諸将を招請し羽柴筑前守を以て第一坐上の客となし三法師君に御代替の御礼以下の評定に及びける北畠中将信雄の御領ハ尾張伊賀北伊勢近江の内百万石にて清洲に御在城三七信孝の御領ハ美濃にて五拾万石岐阜に御在城然るべし於次丸秀勝ハ丹波亀山丹羽五郎左衛門ハ若狭並に江州高嶋志賀二郡池田父子ハ大坂尼ケ崎兵庫柴田ハ長濱五万石秀吉ハ丹波蜂谷出羽ハ三万石中川高山ハ五千石宛加増あるべき由なり然して三法師君ハ安土

に御移徙ありて前田徳善院長谷川丹後守を御傳となし御臺所の御料近江國の内三十万石と評義したりけり一書に瀧川左近将監若狭及び近江高嶋志賀二郡とあれども瀧川ハ伊勢桑名亀山なり依てこれを取ず然るに勝家とかく秀吉に遺恨止がたく諸将會合の席にて故殿の御恩を受て今日我等弐國持の列に加はりいへども我等身命を捨て御奉公せし故のことなれバ父や祖父の武功にても只今に至りて開く處なり然るに筑前守殿ハ御一身の勲功により御馬の口取より御草履取御茶坊主御賄方と次第に昇進ありて今ハ播磨美作備前丹波の國主となり中國の探題職となり玉ふ

奇代の御出世なれバ御勤労ぞありけるの有べからず何ゟ
御信仰の神佛にてもなく又ハ然るべき内縁の御引立に
てもなしや承りたしと申けれバ筑前守何さま御不審
御尤なれバ秀吉が斯まで成出しハ始を申さバ柴田殿
の御推挙なりその節木下藤吉郎と申せし御足軽の
時ハ御館へ數參上をしのミ外に内縁の引立もなく又
信仰の神佛もなしといはれし時勝家あふいくや堪が
たや此間の辛労なるゆう肩が張しと覚へさりあそれ昔
の藤吉郎なふ此痛を按摩せられて給はるべきにと
云しかバ筑前守勝家の後へ廻り親にも等しき柴田殿
の御上なりいで御療治仕るべしといひさま肩より両

腕かけそろ〳〵ともミくだしけれバ勝家も案外の手な
るの故に首を低て言葉なし是ハ秀吉よりも按摩ハなれ
ましその時に喧嘩せんと計なりしなれバなり丹羽池田
の面々も勝家の無禮をいさく憤り筑前守のなさしき
振舞をあきれ堪忍ぞよく凡人ならず深く感服したりけり
勝家いくつかして筑前守に腹立せんとおもひしが
あら筑前守殿ハなかしより按摩ハ上手になられより
御陰にて肩の痛ハ和らぎつされにつきて腰のいさゝか
肩に増たり慮外にハ候へども親に等しといはれし言葉
のゆへバ腰を打て給はんと有りしかバ筑前守左こそ
ゆへしさバ打て進まべしと云ひ〳〵腰を徐と揉より志

かゝる勝家もせん方なくうとくと空寐入してそ居たりけり

一書に筑前守勝家が肩をもみ腰をさすりなどして涙を落されしを佐久間玄蕃允見とがめ筑前守殿には比怯の御心中や親に等しといひながら口惜く思はれて落涙いだされけれハ口と腹とちがひ一尺なきあの間にても虚言を申されけれ事武士の魂を何處へ失ひ給ひしぞと怒られけれバ筑前守いはく玄蕃左様にいはれな筑前守が藤吉郎とて修理どのゝ肩腰をもみし時ハ御邊などいまだ生れしか生れざるかなりその比の修理どのゝ肩ハあつし肉ハゆたかにして腰とても肥太り骨高かりしが按にもいたく骨の折たるしなり然るに今の修理どのハ肩も薄くなられて肉和らかに腰ハやせて骨も痿たりあゝ老たまへりとなみだつきハおぼえず涙の落しなりといはれしかば玄蕃允もいふべきことなく黙然として引退きぬといへり

佐久間玄蕃筑前守問答の事
　并柴田佐久間へ密謀を示す事

かくて佐久間玄蕃允はふかく筑前守に腹立せんとおもひしが勝家が腰を打れて快く寢たる体を見て筑前守に向ひいひけるに筑前守殿御身むかしハ木下藤吉郎とて御足輕なりけるが今ハ播磨美作備前丹波の領主中國の探

題職なりそれが何ぞや勝家の肩腰をかゝへまゐらせ追従とやいはん面諛とやいはん武士の所業と存ぜられぞといひし時筑前守ハ涙をはら〳〵と流し嗚呼世ハ末になり切てけるぞや左様の思慮あさき男を侍大将となし置るゝをあぶなし〳〵抑武士の魂といふものハ十人を百人百人ハ千人千人ハ万人万人ハ十万人とかぞハ増とも身ハ一ツと知べし然バ士卒の食事終りてのち大将一飯し士卒熟睡してのち大将枕に着とかや士卒疾病あれバ大将みづから是を診察し士卒に瘡あれバ大将みづから膿を吮士卒をさへ猶左様にすべしいはんや是ハ舊好なり恩人なり筑前よりハ老輩なり肩腰ハなお

ろか何みても筑前が手に得たる事なれバ更にいなむべきにあらじと存じけり夫を左様にいはるゝからハ御身々組の侍中にいさかひ有とも見あつかひ給ざるや情なき侍大将ぞといはれんも理なれハ満坐の諸将いづれも尤々と同心す玄番允も又いひうべき詞なくべし口してぞ扣たり筑前守又いはく秀吉南都へ参りし時癩病人の風爐屋を見たり是ハむかし聖武天皇の皇后に光明子とやかれまし〳〵けり此皇后の御願とて浴室を立たまひあまたの病人の瘡をたでさせ玉ひしより今に至りて断絶なしとぞ承たる皇后の御身にてだに病人を哀みたまひて是を療治の浴室を立玉へ

さいはんや凡卑の我等に於てをや乞丐の癩病人をさへ勞りたまへりいはんや傍輩の古老をや筑前守がせしを追從にいはゞ面諛にあらずと言葉に淀みなく理明かに述玉へバ佐久間も辭を和げ何さま大丈夫の御心に恥入てハ我等がせばき肝にて量りがたき御心中の廣大なるを此後ハ筑前守殿の御指南に預り申べきにてハと申されバ勝家中ながら起上り扨も〳〵舊き好これど嬉しきものハ無し天晴日本の大將軍たるべき筑前守殿が肩腰を摩玉ひし故かやさほどに痛みし肩腰の常よりも快く覺え候玄蕃なども若輩なり随分〳〵筑前守殿を見習へ申と實に打とけて見へしかバ列坐の

諸將も始て安堵の思ひをなし益々筑前守をよく頼母敷ものにおもひ付しなり勝家ハかく筑前守を滅さんと思ひしかバ玄蕃を呼近づけ筑前守一兩日の内に歸洛するならん其路次ハ如何にも用心すると四五百餘騎にハよも過じ此の間に工夫して人しれず打て捨ばやと思ふなり其心せよと申と下知しければ玄蕃もかねて其心にて我郎等どもを忍び〳〵に清洲より筑前守が歸るべき路次へ伏てぞ待たりけり筑前守ハ天眼通をや得たりけん玄蕃が計りし路次ぞと五人七人かねてより我股心の者どもを或ハ百姓町人に出立をませ旅商人にまぎらして爰かしこに置しかバ佐久

間ヶ郎等どもの埋伏たるを一人も残らず探り知て
竊に筑前守に告しかバ筑前守ハ路次を替て潜し
か奥嶋へ渡りそれより湖水を真一文字に和迩の郷
へ打渡り都へかへり入しかバ佐久間ヶ計策いたづ
らになりにけり
又長濱の漁人の口碑に傳ふ筑前守清洲を發途をし
時ハ加藤福嶋以下三四十人に過ざりしかバ佐久間
もあはれ運の盡ぬる筑前守なりいで是を起しの渡
あたりにて打捕んと起にいたりて待けれども筑前守い
で來らざりしこそ不思議今朝まさしく清洲を立しもの
がいかなれバ今まで見えぬぞや何条途中に隙の入

さぞやと氣をいらち玄蕃只一人乞丐人に身をやつ
し身に荒薦をまとひ竹の杖つき南方宮重の在所く
を打めぐり是を伺ふに筑前守稲葉の里に至りしを
が正しく見しと云人あれども稲葉より此方にてな
誰も見し人なしと云餘りに不思議なれバ清洲へ引
返しつらんと清洲へ至りて伺ふに引返したりといふ
誰も知らざりき起しへと急ぎける路次へ玄蕃ヶ家
人走り來りよにも怪敷ことそゆへ只今墨股にて筑
前守に逢しといひて過るものゝゆへバ呼とゞめて問
糺しいふ羽柴殿ハ鐵炮五百挺長柄七百本弓三百張
を前後に配り騎馬五百餘騎にて押行玉ふその跡よ

を鐵炮長柄弓の足軽幾百人といふ數も知ず混物具に陣羽織前後に備えし其人數凡五六千人もありけんずらんと申てハそれ程の人數清洲までハつれ給ハばまさ何處にかくして置れけん實にいぶかしき事にてありとかゝるを聞て玄蕃盛政肝を消扨ハ清洲へ來なし三四十人のみならずそれほどの人數をかくして連しとかくたり何様にせしやらん筑前守が計策の人に傑れし處かやそれを知ざるに筑前守に出合たらバ如何なる過をや引出ん末代に有がたき侍なると心の底に感じけるとなりそのを柴田も傳聞終に信雄の耳に入けるにより町の奉行村の役人等に仰

さて委細に是を穿鑿しけれバ筑前守の着以前よりかねてより清洲の近處に乞丐人あるひハ六十六部あるひハ千箇寺の修行者などいふものゝ多く入込しが筑前守發途せしよりのちその体のもの一人も見えずありけるそれハ訝しくハと申出しとなり其よりして次第に穿儀しけれバ凡清洲の四方廿餘町が間は右体の者充満なりしが筑前守出立れしのち更に左様のものゝ在ずなりし也
又墨股に黒塚といふものゝありそれが家に太閤いまだ羽柴筑前守と云ける時清洲へ參向ありけるがいろなく此黒塚が家にて郎等どもの衣裳を改めさせ

けるに庭の奥なる一室より夜の間よねけくと出立
なふより黒塚が家のめのさん筑前守總人數いく
ら計なて來りなひしといふを我知ぞといへり
又室江北脇と云處ハ墨股よりすこし西なるかその
兩村の堺よ楠と榎の杜ありこの杜の中に六七尺許
の石あり是を太閤の腰掛石といふ太閤いまだ羽柴
筑前守といひしころ清洲の會合よ赴きなひける時
この杜にて供の人々の支度を替られしといひ傳ふ
佐久間玄蕃ハ筑前守定めて長濱へ入る引渡しの用意
をなしそのゝち都へ入なるんいづれみも長濱へ立よ
らぬをふあるまじと思ひしなバ起しの渡にて打から

しける時ハよく計りて大垣たる井關原玉村藤川春照と
處々に人數を配りて待しかども筑前守とおぼしき旅
人も見えざるかなよりその者どもあきれはてく引かへ
し玄蕃にかくと告しかバ玄蕃も我策の相違をしきを
悔ミてたゞものもいはずして居たりしとなり
一書に佐久間玄蕃允羽柴筑前守が帰路を襲んた
め尾濃の堺なる起の里よ伏を置て待けるに待期過
れど筑前守出來らざバあまりに待あこがれ清洲へか
へりて尋ぬれバ今朝早く立なひしといふより又
引返して求れど更よ知ざバ玄蕃志きりに氣をもみて
起の上なる笠松のほとりまでハ下なる中野前野の

あまりまで子細に穿議しけれバ此渡の渡子のいふ様この三四日の間など京田舎の商人の清洲へ立入しかずハ容易きにハあらじ理や東國北國の大名の會合なれバさぞな商ひも有りつらんさりとて清洲にてハさうもいそねこそふしきなれといひしとかや是も筑前守の郎等どもの形をかへしとしられたり

重修真書太閤記八編巻之八　終

重修真書太閤記八編巻之九

長濱城引渡しの事
并森勝藏人質を殺せし事

羽柴筑前守秀吉が清洲へ參向しける供の兵士ハわつかに三四十人なりしか共實ハ様々に形を替て爰彼處にかくし置けれバ佐久間が計策を聞とそのまゝ起川の西より鐵炮長柄弓の行列を立まづ安土へ伺候しそれより湖水を打わたし京着ありしを更に知ものなし變化奇正を自在になし得し軍略ハ人その痕蹤をしらず古今無双の名將なれバさしも有ぬべし佐久間猛烈と

いへども筑前守の出没不思議なるに驚きなまじひな
ることを仕出しなば毛を吹て疵を求むると云譬の如く
後悔その詮あるべからずとて手を空しくして引返し
柴田勝家ハ清洲を發し越前へ引還らんとして既に濃
州垂井にいたりて熟と思ふ様清洲にて筑前守に腹立を
んたる種々と計略を施しつるを筑前守も定めて知つ
らん明日よりハ近江坂田郡に入べしそれより淺井伊
香の二郡にかゝらずして越前に入べき路もなし此三
郡ハ長濱領なり筑前守いかなる奇計をや設つらん容
易に敵地へ入がたしとて爰に逗留數日に及ぶ筑前守
此由を聞て修理進ハ古兵なりさも有べし去ながら何

とて柴田の遺恨をとかしむべけんや其疑心を散ずる仕
様ありとて於次丸秀勝をして柴田を越前へ送らせけ
る柴田於次丸を中に立江州路をゆるらかに柳ケ瀬に
いたり爰より越前程近し筑前守の厚意感ずるに餘り
ありとて數々の進物善美を盡し於次丸を京都へ送り
けり於次丸といふハ右大臣殿の御子なれバ勝家にも
主人なり筑前守の子にして子に非ばそれを人質の心
にて送らせし秀吉の心の底こそ怖ろしけれ
柳ケ瀬より椿市中河内板取今庄湯尾脇本府中鯖江
水落淺水福井を経て越前北庄まで凡廿餘里なり
勝家北庄に皈り着て直に長濱の城請取に伊賀守勝豊

を差立ざれとまづ使者を以て勝豊を呼勝豊越中陣よ
り居城丸岡にかへり暫時兵馬の疲を休め居たる處へ
北庄より使者ありて急ぎ参るべき由を申ば勝豊元來
實子に非ざれば近比父子不快なりつるに火急の使者何事
やらんと思ひしかどもさて止べきにあらねバ北庄よ
り馳参りしに江州長濱の城請取て彼處に住べしとの事
なりしかバ勝豊かしこまりぬとて家老徳永石見守木
下半左衛門與力には匹田左近大金大八山路将監神谷
越中守等を引率して取ものも取あへず長濱さして進
發を羽柴筑前守ハ長濱の城代湯淺甚助を呼で此度子
細ありて長濱の城を柴田修理へ渡を間近きうちに柴
田伊賀守勝豊請取に來るべしその時異議なく渡すべ
き旨を申こたしそれゆゑ甚助をひそかに招き長濱を
勝家に渡すといへども遠くて三年近くハ明年の内に
取かへし可申間能々在地のものへかたく申付置し計
策ハ今此時ぞと申渡すべしその手段ハかやう〳〵と一書
にて渡ししかバ甚助心得そのまゝ長濱の宿老撿斷に
下知しければ何も畏りとて城下にゆかりその手便を
なしたりけり長濱の町人共ハ筑前守の此年頃の仕置
と悦び居たる處なれバ柴田に替るをもと喜ばず然るに
遠からず筑前守の手に戻るべき由を聞て然バ暫時の
間の事なり何れとも筑前守の為よろしき様に働くべ

けれと何れもく會圖の時刻を待て粉骨を盡すべしと
ぞ勇ミのゝしりけり伊賀守勝豊ハ手の者召具し長濱
に到りまづ町屋に旅宿し城中へ案内しけれバ城代湯
淺甚助出迎主人筑前守の申付し旨を答へ役所く武器
米穀を一書にしてこれを渡し伊賀守これを受取その
のち甚助ハ出城し伊賀守ハ入城し万事首尾よく天正
十年七月十一日に交代しそけり其後京都にてハ諸卿
僉議の上筑前守が洛中洛外まで仕置行届き且事古今
に勝れ下々安堵し各々其家業を勤めおのく太平に赴
きるんとも是併秀吉が大功あり功を賞するハ政道の
先んずる處なり早く涯分の抽賞あるべしとて御内意

度々に及びし處筑前守かたく辭し奉りしかバかさね
て勅書を下されそけり

去六月二日右大臣父子上洛の處明智日向守光秀企
逆意弑之殊二条御所亂入之条奇代之狼藉也不及是
非次第也其時秀吉至備中國與西虜合戰之處不移時
日馳上誅討明智一類報主之仇洛中洛外殆屬静謐之
条古今希有之武功也於是抽賞之宣下及再三謙退固
辭之意亦神妙也雖然有功而無賞者王道之闕典也因
被叙従五位下任右近衛少將聽昇殿之条
天氣如此也仍執達如件

天正十年七月日　藏人頭左近衛中將藤原朝臣

羽柴筑前守殿
とありければ筑前守あらため故右大臣家へ贈官贈位
の御沙汰ゆ様願ひ奉る次に送葬法事仕りゆて後に御
請可申由を奏聞しければ直に贈官贈位の宣下ありそ
れより本能寺に仮屋を立幕を打て四方を警固し法華
宗十六本寺の能化所化を集め千部読経を執行し鳥目
一万貫白米千俵本能寺門前にて是を施行したりしか
バ洛中洛外のものの群衆して尊びあへり然御葬送ハ紫
野大徳寺然るべしとて御遺骨を荼毘し御塔を造立し
七月廿一日ハ七七日の忌辰なれば御法事を大徳寺にて
執行ひ玉ふ由を北畠神戸の両公達をはじめ柴田瀧川

丹羽佐久間などすべて織田家旗下の大小名中へ悉く
使者を立て演達あり中にも濱松ゆハ泉州堺より間道
を経させられ御帰國有て急に軍兵を催され明智退治の
ため御出陣ありける處六月十九日明智滅亡の注進を
聞召定められ同廿一日御凱陣あり又甲州府中の川尻
肥後守の許へ本多百助を御使として信長生害の由を告
玉ひしに川尻いかりに心得ちがひしたりけん本多を切
殺し是に於て國人忽に起り立川尻を切首を山縣三郎
兵衛が同心たりし三井彌一郎これを取成瀬吉右衛門
日下部兵右衛門岡崎次郎右衛門大須賀五郎左衛門等
甲州に入古府中及び市川に陣して甲州先方の侍を招

つきあふにより甲州暫時に平均に屬し信州川中嶋の
森勝藏ハ越後へ亂入し大田切口にて一戰しけるに勝
利を得たりしにより景勝の居城春日山までも即時に
切入んと勇みたちける處へ信長公の御事柴田が許よ
り知らせしかバ越後口の軍を還し上方へ切て上らんと
其支度をなし伊奈の毛利河内守と同じく打立んとし
ける處に信濃國人春日河内守長一に申けるハ信長公
御事かゝりけるにより御上洛の由にハさりともゆるさんまハ
國人の人質とらせ御返しさてのち川中嶋をかたく守りハ
へと御下知ありしが可然と申けるを勝藏聞て大に怒り
其方共我等をあざむき此處へ歸るまじと思ふが故に左
樣の事を申なるめ惡き汝等が云條申と云て更に得心
せざりしかバ國人騷ぎ立勝藏が路次を塞ぎて是を止
めんとしけるによつて勝藏ますます怒り眞先に立て戰ハ
ける程辛くして猿が馬場といふ處にいたり春日が子
を始人質をことごとく切殺し突殺しければ一揆いよいよ起
り立ちけるに長一手勢十七八人に打なされ松本に至
て木曾義昌を頼み岐岨の山路を分川、美濃國岩村に
いたりそれより清洲へぞ參上をしとかや

右大臣家御法事日限の廻狀の事
並勝家一益旅宿にて相談の事

右大臣殿を紫野大德寺葬送し奉り御塔を造立して總

見院殿贈大相國一品泰岩浄安大禪定門と稱し奉り七月廿一日ハ七々の御忌日なるにより各參詣焼香あるべき旨三法師君の仰により羽柴右近衛少將秀吉奉るとの廻状を出しけれバ濱松へも到來しけるにより御參詣あるべきや否面々の異見聞食るべきとの御諚あり本多平八郎忠勝進ミ出て右大臣殿御代にハ各別御懇意に御取交しありつれ共それハ時に臨ミてのそれ勢につれ且ハ官位にもよりての御事なり累代相傳家僕と共に參拝焼香に及び候まじと申上けるを酒井左衛門尉忠勝の申さるゝハ處當然なれ共羽柴筑前守三法師丸をいさて右大臣殿の遺跡に定め其身右近少將に任じ三

法師丸を補佐して此法事の回状を出さしなれ共其内心ハ右大臣殿の如く當方をも取扱んとの差略と聞え候三法師丸ハ僅に三才なり表にハ主君と立れ共万事ハ筑前守の意次第たるべし然バ今度御上京に及び候まじくと言上しけるを聞食も何めの云處も御胸中も同じく符を合をしが如し然ながら無沙汰になさせられんも御本意ならぬ病中なれバ名代を上すべし酒井左衛門大儀なれども罷り上れと仰付らる又柴田修理進此廻状を得て大に悔ミける我上杉を責拔んをを望ミて北國へ下向し難義の軍して右大臣殿の弔合戰にも後れし悔しさその上に右大臣殿御葬送の御事

も忘れ今まさ七々御法事と聞えれしその口惜さかく
る大切の事とても都て猿めに先を取まるゝを残念いかり計
とうかりかわら嫉ましやあら羨しやと云ながら都の
かたを延上りく疾視つめて立たりけり良ありて勝家
何か胸中に會得したるをありと見え俄に旅装を整へ
濃州岐阜へ到り三七殿に申けるハ君ハ信雄君より廿
日先に御誕生ありつれども御母の筋目軽しとて三男
になりたまふ今度勝家存ずる旨の候へバ紫野にて御
法事の時第一番に御焼香あるべしその後勝家取計ら
ふ様ありとてやて打連て濃州を發し瀧川左近將監一益
バ北畠殿と共に上京したりけるが筑前守の役人日岡

に出迎え柴田瀧川両人に向ひ三法師丸殿の御意候右
大臣殿七々御參詣として各上洛悦びおぼしめされ候
手狭にて万事不自由たるべく候へども旅宿を仰付ら
まれ候緩々休息然るべく候と挨拶を両人旅宿に入て見
るに上段中段下段の坐敷を構へ床に三尊の名畫を掛
立華砂鉢心を盡したり風呂の設料理の精進三獻の臺
馬屋四下場の用意肝をつぶし眼を驚かし又上杉景勝
右大臣殿薨去の虚にのり切て上らバ大事なりとて此
方へ切取し城々を返し和睦を調ひし上なれバ無沙汰
に為べき様なしとて此法事の事を告たりしかバ景勝
心得ず氣にて居たりけるを直江山城守天晴氣の利た

る秀吉かな昨日ハ敵となり今日ハ味方となる弓箭取の常にて既に和議調ひし上ハ一家も同じ然バ何ぞ吉凶とも相互に音信せざらんや是ハ筑前守が當方を試る計策にて某御使として上京し筑前守が様を能々見定めてそのゝち又調略もゆべしと申ければ景勝實もと同心し直江を京へぞ上せらる又毛利輝元ハ福原越前守小早川隆景ハ中川主馬首吉川元春ハ谷川市太夫を上せしが各案内よりまて旅宿に入いづれも馳走に驚きしとなり柴田と瀧川が旅宿ハ同じ處にて軒を連ね隣なり勝家一益を招きて申様ふくし筑前守が今度の取賄ひその費用いくばくと云を計るべからず本

能寺にて初月忌の法事に千部讀經の作善を營ミ今また御葬送御七々の御追福を大徳寺にて執行ふその金銀米錢何ほどの入用かやその上に我等をはじめ諸家の旅宿の手當すこしも透間なし此ほどの大儀を我等へ無沙汰にせしも心あるべし但筑前守悪しとて御法事に出仕をせずハ天下へ對して詞なし瀧川殿ハ何と思召れけるぞと問バ一益答ふる様何さま筑前が今度の仕様氣儘の至りと申べし然しながら我々が方に第一の後れハ故殿の御為に明智に向て箭一筋も射ず第二にせめて安土の御城にても取かへすことなくハ日野へ參上し三法師君を守護すべかりしを如何よろたくて

る此事にも及ばば第三に御初月忌第四に御葬送第五
に御贈官第六に御七々の御法事第七に諸大名衆への
告なり此七の後れたれば筑前と評めべ無益と存ずる
なりかゝりても申せし如く筑前守が三法師君を蔑如に
し奉りしをも見出して其後に事をたくらむべくは然に
より一益すべく猿が差略に付て事の様を見はらんと
覺悟しては と云柴田も此事の後れ有るべく胸中に既に
蓄へあれば怒りを押えて上京せしに瀧川が意見するに
依て又いふく氣をおとしつれどもへらぬ体にて一益
と共に一獻に及び然もく猿めを故殿へ推擧せしハ某
なり然るにいつしか我等よりも切上り國をまで領し

此大儀をも一人にて執行なさんとかゝる顔なくし然と
も万事六日の葛帯となりつれバ猿めが後舞をせんを口
惜とも云計りなしと云バ一益心付て勝家に申様大
徳寺へ香奠を獻ずべし柴田殿ハ何程の御用意にやと
問勝家聞てさらにも香奠用意仕りて候是ハ某織田家
随一の家格たるをもつて黄金五拾枚用意候猿めハ當家
の先格を知まじければ是計ハ勝家が仕かちて候と覺
え候と云バ一益我等ハ白銀百五拾枚用意して候柴田
殿とも違ひ新參なれバ然るべく候はんと云柴田家來
を呼で其方今より大徳寺へ行よそなりしら羽柴が香奠
聞て參れと云付て出し遣せけて走歸り勝家に申様大

德寺へ罷向ひ知事の僧に向ひさてもく大造なる御法
事なり御香奠もさぞ夥しく納りしなんと申を
バ其僧いや申とよ筑前守どのゝ獻備ハひさバ此御贈官
贈位より御葬送御法事の經營莫大の事なるに御香奠
黄金五拾枚白銀三百枚青銅一万貫精米千俵にてはと
語りけるとぞバ柴田も瀧川も顔見合をましあきれて
詞なく柴田をめて白銀三百枚を添だ申と思ひつれど
も越前迠ハ程遠く京都にて才覺せんにも用達かたし為
方なけまで勝家種々と工夫しつれ共金子のをなれど
天よりも降ず地よりも湧ず夜いまだ明ざるに比
に柴田も瀧川も使者を出し立て大徳寺へ獻上しけり

るものすら猿めにおくれしその口惜さよと額をあつ
めて語りあへ
天正十年の頃黄金一枚米三拾五石に替と以へバ五
拾枚ハ米一千七百五拾石の價なり當時の一千七百
五拾石ハ今京升にて一千六百八拾石に當る四斗俵
四千二百俵に准ぞ今の米價凡二千百両と知べし二
千百両を五十に歸バ黄金一枚今の四十二両に替と
聞ゆ
江州安土總見寺の位牌にハ總見寺殿贈大相國一品
泰巌大居士天文三年甲午五月廿八日生吉法師天正
十年壬午六月二日とあり又三州長興寺藏する所の

眞影とハ天德院殿一品前右相府泰岩浄安大禪定門天正十年壬午六月二日御他界右信長御影の御報恩相當於一周忌之辰描之三州高橋長興寺與語久三郎正勝寄進之天正十一年六月二日とかりて上下の御影あり

重修眞書太閤記八編巻之九 終

国立公文書館
National Archives of Japan